體驗の哲學

勝部謙造

一

「體驗と詩歌」の著者ウィルヘルム・ディルタイが、チロル旅行の途次病を得、數日の後溘焉として長逝したのは最早一昔前の事である。元來彼特有の豐かな天分を以て我々の精神生活のあらゆる方面をきわめ、しかも枯淡なる論理的見方にあきたらずして、進みて直に「生命」の核心にまで深く入り込んで行くと云ふ態度を持した彼の思想は、實に趣味津々汲めどもつきざる味があつて、彼の著書を繙くと恰も一篇の詩を讀むが如き感興を覺ゆる。それにも拘はらず學界に於ける彼の位置は、未だ彼の眞價通りに充分認められては居ない事を示して居る。これには種々の理由もあらうが次の二つが其最も大きなものであらう。

一つにはディルタイは餘程多方面の人であつて其研究の目的は變らなくとも興味の中心とも云ふべきものが時々變つて行つた人である。彼の門人が評して居る樣に「彼はカントやスピノーザの樣に時間を忘れて專念一つの大思想を築き上げて行

く方ではなくして、寧ろライプニッテの様に絶えず、求め、學び、擴大し、且つ自己を克服して探求に向つて行く型の人であつた。(1) 從つて彼の著作も殆ど一部として完結したものがないと云ふてよろしい。彼の主著「精神科學概論」ですら僅に第一巻を出しただけである。ミッシュ(2)によればディルタイの歿後彼の手稿等を調べて見るに此書は少く共第三巻迄は出す心組で居たらしい。其後の彼の思想は悉く零碎な論文となつて雜誌や大學年報の内に埋れて居る。これでは中々一般讀者の眼に觸れないから、折角の思想も隱れたまゝ知られずにすむ事が多い。これはかの彼れの「體驗と詩歌」の場合を見ても分る。此書はもと〳〵一冊の書物として書かれたものではなく、彼が隨時隨處に書いておいた文學上の論文をば、彼の門弟供が秩序を立てゝ編輯出版したものである。それが初めに發表された雜誌等の中に埋れて居た間は全く世人から顧みられなかつたが一度書籍の形になつて世に出ると非常な影響を文學史上に及ぼす樣になつたそうである。(3) 然し彼の歿後最近に彼の門弟等が彼の遺著をば未だ世に出でない手記類に至るまで渉獵して全集として出す事になつて居るから此缺陷は其内に補ふ事が出來るであらう。戰爭前にどれだけ出版したか分らぬが、日本には其第二巻(4)だけが來て居る。これは彼の「精神科學概論」の續篇とも見るべき

歴史的研究論文を集めたもので門弟のミッシュが序文をかいて居る。

ディルタイが學界に充分認められない今一つの理由は、彼の思想は概念的知識のみによつて解すべきでなく、彼自身が主張して居る樣に我々の精神活動全部を以て初めて解し得べきであるが故に、往々誤解せられる傾向がある。例へば彼の思想の根柢となつて居る「外界實在の信仰」[5]に關する論文の如きは彼の門人フリイスアイセン・ケーラーも認めて居る樣に根本的に誤解せられ、作者の眞意は遂に認められるゝに至らなかつた樣である。この事についてはいづれ後にくはしく述べるつもりである。

ディルタイには多くの門人が居たが、彼の思想を最もよく理解し、よくこれを祖述發展して居たのはこのフリイスアイセン・ケーラーである。色々の著書もあるが「實在問題」及び「科學と實在」[6]とが最も此人の立場を明にするに適當である。惜しい事には彼も此度の戰爭に從事して戰死したといふ話である。彼は「カント研究」や「ロゴス」誌に於てディルタイの性行や思想を紹介して居る。本篇の筆者の如きそれから尠からぬ暗示と材料とを得て居る。

(1) Frischeison-Köhler:—Wilhelm Dilthy. Kantstution XVII.

(2) Georg Misch:—Vorwort. Weltanschauung und Analyse des Menschen.

(3) Frischeisen-Köhler:—Wilhelm Dilthey als Philosoph. Logos III—1912.
(4) Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften II Band Weltanschauung und Analyse des Menschen seit Renaissance und Reformatin.
(5) Dilthey:—Beiträge zur Losung der Frage vom Ursprung unseres Glaubens an die Realität der Aussenwelt und seinem Recht. Sitzungsberichte der Akademie der Wissenschaften 1860.
(6) Frischeisen—Köhler:—Das Realisitproblem Berlin 1912:—Wissenschaft und Wispliichkeit Leipzig 1912.

二

ディルタイの哲學思想を理解するには彼の思想の根柢にある一の假定から出發せねばならぬ。それは形而上學が學問としては成立し得ないと云ふ事である。これは彼が幾度も幾度も繰り返し機會ある毎に述べて居る見解である。勿論此考は獨りディルタイのみではなくてカント以來批評哲學の傳承に於て、其實證的傾向を帶ぶると又先驗的傾向を有するとを問はず、等しく主張せられて居るものである。最近又形而上學が色々な形に於て或は公然と、或は隱密に頭をもたげ出して來た樣であるが、これに對して實證的經驗科學者はもとより、かの新カント派の人々は極力反對して居る。然しディルタイが形而上學に反對するのはこれ等の人々とは全く其根據

を異にして居る。彼は單に理論上から抽象的に限界概念等によつて形而上學の不成立を說かうとするのではない。

ディルタイによれば形而上學の態度は矢張り思惟のみに偏した外面的の見方であつて、世界の本體を窮めようといふ其目的に添はない。學問として成立し得ない矛盾を自己の內に包藏して居る。これは畢竟人間の長い思索の歷史が抽象的に凡ての事物に論理的關聯を與へようとする習慣を造つた爲である。世界の論理的關聯といふものゝ確實性はいづくより來るか。畢竟思惟から得來つたものに外ならぬ。然しながら我々の思惟のみによつて決して世界の內面的本質を捕捉し得るものでない。或は又このやうな、事物の內面的關係を知るために本體とか因果性といふやうな表象を持つて來て見る。然し此二つの表象位曖昧なるものはない。我々はどうしてこれ等を明瞭に一義的に決定する事が出來よう。これ等はつまり我々が經驗を說明する方便として使ふ假定に過ぎない。(1) ディルタイ自身の語を借りて云ふならば幾千年の人間歷史は偉大なる世界觀人生觀は決して理論的思索とか概念活動とかの產物としては現れて來ないと云ふ事を示して居る。これは人間精神の深い所から湧き出でゝ來る經驗からのみ得られるものである。形而上學といふ灰色な

幕をあげて見ると其後にはいつも「生ける人間」が居る。其人間の脈管には理性や思索の薄い液汁が通つて居るのではなくして、眞の血液が流れて居るといふのである。(2) それであるからして形而上學に於ては到底絶對の眞理を捕える事が出來ぬ。いつも相對的部分的に世界の片影を追ふて居るに過ぎぬ。故に古來樣々の學說が興亡常なく殆ど歸着する處を知らず、全くanarchie の狀態であるのも無理からぬ事である。(3)

(1) Dilthey :— Einleitung in die Geisteswissenschaften S. 158 ff,

(2) Köhler :— Das Realitätsproblem S. 45.

(3) Dilthey :— Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen. Weltanschauung S. 3

三

ディルタイの哲學に於てはいつも Leben といふ考が最も主要なる位置を占めて居る。彼は實にこれを以て哲學の出立點にして居る。然しこれは決して生物學的もしくは傳統的意義に於ての Leben を云ふのではない。これはそういふものではなくて、我々の內的直接經驗を云ふのである。我々の意識に現はれて來て、決して疑を

挾む事の出來ぬ事實や狀態やを云ふのである。ディルタイに取つては此內的經驗の確實性が最も確かな動かないものである。外界世界の觀客的認識といふやうな事についてはいつでも異論が起り得る。何となれば現象界の根柢に存する本體といふやうな事については只假定が立てられ得るのみであるからである。然しながら我々の實際經驗する意識に現はれて來る現象や狀態については疑を許さぬ。これに於て眞の知識が與へられるのである。ディルタイはこの內的直接經驗をば體驗 Erlebniss と云ふて居る。この體驗には只感覺的現象ばかりでなく、これとは別種の事實や關係を無數に含んで居る。これは凡ての思惟作用に先立つものであつて、又歷史的に變つて行く事實で、歷史的發展により漸次深く又廣くなつて行くものである。(1)

この體驗が我々の知識となる方法には二つの方向がある。一は對象的捕捉 gegenständliche Auffassen であつて、他は領會社用 Verstehen である。對象的捕促と云ふのは先づ〳〵普通の論理作用を云ふのであつて知覺、表象判斷概念推論等に於てあらはれる關係全體を云ふのである。ディルタイはこれを Aufklärung, Abbildung 及び Vertretung の三階段に分けて居る。Aufklärung とは比較とか辨別とか云ふ初步の作用によつ

て所與が意識中に明らかにせられる事を云ふて居る。Abbildung とはこれが表象に寫し出される事を云ひ、Vertretung とはそれが推理的思惟にあらはされることを云ふのである。

領會作用といふのは無論この對象的捕促の制約の下にあるものであるが、もつと進んだ深い方法である。一體我々の體驗に於ては雷だに知力のみでなく情意も加はり精神全體が働いて居るものである。この精神が全體として働く內的經驗に含まれて居るものには一の個體的關聯が備はつて居るものである。ディルタイはこれを Struktuzusammenhang と云ふて居る。これは體驗に於て與へられる他の部分と等しく直接なものである。實際生活に於て、我々の個々の體驗は皆經驗の一全體に關係して與へられる。卽ち個々の體驗は一の統一せられた經驗の大關聯の一肢體となるのである。言ひ換ふれば委くは領會作用に於ては生きたまゝ或は變化發展しつゝあるがまゝに與へられる一「全體」の關聯から出立して、反省作用により之に屬する個々の肢を明にするものである。この「全體」の關聯が我々にあつて働いて居るので我々が個々の命題とか身振りとか行爲とかを領會する事が出來るのである。

この樣に我々の心意の全部が樣々の關聯をなして働いて居る。そして此關聯の

交叉點が卽ち「我」である。主觀である。而して我々の心意がかく體驗に於て働いて行く內に、何かしら限られた樣な、沮まれる樣な一種の抵抗を經驗するものである。これは我々の意志活動や行爲に於て最も明かに感じられるものである。ディルタイによると我々の體驗が內界と外界、主觀と客觀、我と世界とに分れる分岐點は實に茲にあるのである。これは一見甚だ素朴な粗雜な考の樣に思はれるが、それは我々が習慣的に思惟のみにより論理的に物を見ること慣れて居てそういふ見方で考えるからであつて、情意をも含んだ心意全體の活動を常に眼中において居るディルタイとしては或は至當であるかも知れぬ。吾人が前に述べた「外界實在存在の信仰」の基礎をばディルタイは矢張りこゝに置いて居るのである。

(1) Küller:— Wilhelm Dilthey als Philosoph S. 34

四

かくディルタイの哲學は內的經驗を以て出發點とするのであるが、此內的經驗卽ち體驗に於ては我々の知識はいつも全體と肢との關聯で進み行くものである。ところが此關聯は無限に發展して行くものであるから、各瞬間に於ける我々の知識の

全體は次の瞬間には更により大なる全體の一肢となつてしまふのである。故に我々の知識は常に相對的なものである。絶對的に「全體」を捕えることは出來ぬ。そこで我々は凡て體驗の歴史的發展といふ事に非常な意義を認めることになり、眞理は只歴史に於てのみ見出されることになる。ディルタイは我々が前に述べたように學問として成立を許さなかつた形而上學をば、こゝで色々な說の歴史的發展といふ形で其意議を認めて居る。彼はこれを世界觀の哲學 Weltanschauungslehre といふて居る。これは彼が晩年に餘程熱心に主張したものであつて、同人を糾合して Weltanschauung と云ふ大きな論集を出したり又フッサール等にやかましく批評されたりして居る。(1)

今彼によると我々を圍繞して居る世界に對しての我々の氣分は始終變化するものである。而して宗教家や藝術家や哲學者はかく變化する經驗を記憶に殘し其形狀を意識に上せ、而して個々の經驗をば普遍的の大關聯に結合する。こういふ處からして吾人の世界觀なるものが成立する。各個人の實際經驗に於て此世界觀は其氣分の變ると共に始終變化して居る。色々の經驗の影響により、或はゆつくりと或ひは突如として變るものである。我々の一生を通じて樣々な世界觀が新陳代謝して流れて居る。かく多樣な世界は宗教、藝術及び哲學の共通の對象である。而して

これ等の世界觀は皆其成立に應じて色々違つた構造を備へて居るものである。この樣々な構造からして宗敎や藝術や哲學の內部的關聯を知る事が出來るものである。形而上學的世界觀は凡ての學說體系は自ら丈が唯一の普遍妥當的體系であると主張する所に其特徵がある。然しこのやうな事の不可能なのは前述の通りである。

世界觀の體系の分類法には色々ある。發展の狀態よりすれば獨斷論と批評哲學とになる。或は發展の過程全體の上から見れば經驗論と合理論、實在論と概念論との對立が起つて來る。其他色々あるが、ディルタイは實在論と概念論との對立が最も根本的であるとして居る。此對立は其對立前に遡つて歷史的意識に歸つて見ねばならぬ。歷史的研究は事實に存在せる各體系の反對、對立せることそれ自身を對象として居るものである。然しこの樣な對立にも其根柢をはLeben其者に有して居るからこれを歷史的に研究して雜多な多くの體系中から類型Typeを區別することが出來る。なぜなれば形而學上の人生觀の類型は哲學者自身の性格と同一であるからである。(2)

ディルタイは歷史的比較研究によつて三つの重なる類型を得た。Naturalismus, Ideali-

smus der Freiheit 及び objektive Idealismus これである。(2) 勿論此歴史的比較研究法にも特殊な難點がないでもない。比較せらるものゝ特徴を撰ぶには一の標準が必要である。然しこの標準は凡ての研究の完成を俟つて初めて明かになるからである。だからしてこれは只豫備的のものであつて其核は矢張り直覺によるだけである。これ形而上學にたづさはる人々が永久に問題の絶對的解決を見ない所以である。

(1) Hussenl.— Philosophie als strenge Wissenschaft Logos I—1910.
(2) Dilthey:— Das Wesen der Philosophie S. 26
(3) Dilthey:— Die Typen der Weltanschauung S. 17

五

かくの如くディルタイは歴史といふものを非常に重んじた。それで歴史的理解作用の研究が大切な問題となるのである。歴史のMethodの問題は近代の歴史學派があらはれて以來、自然科學的の思惟法をば精神界にも及ぼすことによつて一應解決がついた樣であつた。この樣にして生れて來た一の自然主義的歴史哲學が卽ち社會學である。然しディルタイはこれでは滿足する事が出來なかつた。我々が前節に

於て示した樣に彼は我々の內的直接體驗に於て內界と外界との分裂することを說いて居る。然るに今この外界の認識それは無論內界を通しての認識であつて外面的皮層的たるを免れないが、この外界の認識法を以て直ちに我々の精神界の直接輕驗に及ぼすのは矛盾の甚しきものである。それでディルタイは外界に對して自然科學がある樣に、內界に對しては精神科學 Geisteswissenschaft といふものがなければならぬと主張して居る。これが卽ち精神界に特有な方法で以て、ディルタイの所謂歷史的社會的實在 Ges-chichtlich-gesellschaftliche Wirklichkeit と名づけて居るもの、卽ち體驗に現はれて來る精神界の事實や狀態を研究して行くものでなければならぬ。精神科學といふ語を用ひ出したのは實にディルタイが嚆矢である。而して彼は此精神科學に關する考を先に述べた彼の Einleitung in die Geisteswissenschaften に於て述べ、尙引續き色々の論文に於て此問題につき論じて居る。精神科學の研究方法は無論我々が前に述べたやうな心意全體の働く體驗に於ける領會作用によるものであるからして、此精神科學概論等云ふ書物も我々が之を讀むに當りて他の本を讀む時と同じ樣な純論理的な立場を以て臨む時は、甚だ分り難い處もあるし又あまり粗雜で失望する樣な處もある。

この精神科學の對象には無論我々各個人の生活の基礎的のものがなるのである。

社會とか歴史とか云ふものゝ根柢にある最初の要素たる精神物理的個體をばディルタイはLebenseinheitと云ふ名で呼んで居る。これは先づ前述のStrukturzusammenhangとして我々の體驗に現れて來る。即ち生活其者の構造を備えてあらはれて來るのである。從てこれは其以外の如何なる組織構造にあてはめても考へる事が出來ぬのである。此點からしてディルタイは在來の構成的心理學に對して激烈な反對の聲をあげ彼の所謂記載的分析的心理學die beschreibende und zergliedernde Psychologieとゝふものを主張して居る。これは他の場合にはRealpsychologieとも呼び彼の晩年にはStrukturpsychologieと云ふ名を最も好んで用ゐて居た。この記載的分析的心理學の事に就いては嘗て本誌に紹介しておいたからこゝには省く。(1)

歴史に於てこのLebenseinheitが多數集まつて働く所に個體を超えて初めて意義と存在とを有するある心象が成立する。蓋し凡てのLebenseinheitも亦畢竟此各個體を超越した社會的歴史的存在の大全體中の肢體となつて初めて全き意義と存在とを有するものである。この大關聯をばディルタイはWirkungszusammenhangと呼んで居る。この關聯は我々の精神生活の構造に從つて價値を作り出し目的を實現するものであつて自然界の所謂因果關聯とは全く別種のものである。つまりそれで歴史

的生活といふものは創造して行く働をもつて居る。それ自身に獨りで財や價値を作り出して行く活動である。それで歴史的實在に關する概念は凡て此活動が自分自身を顧みて見る反省作用の結果に過ぎぬ。而して精神界に於てかういふ獨立な創造作用の Träger は個體、社會及び文化體系である。

この個體卽ち Lebenseinheit を取扱ふ精神科學には心理學と Anthropologie との二つがある。この二つが歴史的生活の凡ての認識の根據であるし又社會指導の指針である。一體ディルタイは上述のように凡てのものを純理論的に見ることは非常に反對して居るのであるからして學問についても彼は常に兩方面あるを必らず認むべきを主張して居る。卽ち科學は一方では Theorie であると同時に他方では又 Technik であり又 Lebensmacht であるのである。卽ち科學も矢張り一の Wirkungszusammenhang である。(2)

次に個々の psycho-physische Lebenseinheit を記述するものがある。これは Biographie である。これは根本的歴史事實を純粹に叙述するものである。又心理學と自然科學との限界點にある特殊の研究範圍がある。從來これを初に試みた人の命名に倣つて Psychophysik と呼んで居る。物心間の關係を形而上學の論爭とは別に事實的に定

めようといふのである。

其次にEthnologieと云ふ學問がある。これは民族の事を研究する學問であつて種族の分化及特性といふ樣な事を決定するのである。此民族の研究は精神的のみでなく肉體的にも認識し得る根據をもつて居る。又國民性とか民族精神とかいふ概念があるがディルタイは歷史研究にはこれは許す事が出來ぬと云ふて居る。なぜなれば民族の研究は分析的にのみせられ得るものであるからして、初めからしてかかる概念を許すことは出來ない。

民族の研究は更に他の二つの部類の學問の研究を俟つて初めて完成されるものである。其一つは文化體系を對象にして居る學問で、他は國家及び其他の外的組織Staat und äussere Organization der Gesellschaftの學問である。前者の部類に屬する學問は甚だ多い。宗敎とか藝術とかに關する學問は無論此部類に屬す。道德學もやはり此に屬す。敎育學は道德學で定めた目的を實現する手段の學問である。次にディルタイの外的組織と云ふのは社會の內部に於てある特殊の意志が各個人の行爲を律するといふ所から生じて來た一つの大きな統一的意志の力である。この統一的意志がこれに結びついて居る各個人にこの力を加へる事によつて此目的を實現する

のである。此外的組織の研究の中心點は國家學である。又法律學や教會學に於ても其一部分が發展したと云ふて居る。(3)

(1) ディルタイ記載的分析的心理學　哲學研究第三卷第九册

(2) Köhler:— Das Realitätsproblem S. 60

(3) Dilthey:—Einleitung in die Geisteswissenschaften S. 34 ff.

六

西洋の大きな教會堂等に古い色硝子を使つて、窓に樣々な繪模樣が表はしてある。この窓硝子は其建物の外から見たのと、中へ這入つて見たのとでは全く趣が違ふものである。外側からでも大體の色合とか模樣とかゞ分らぬでもないが然し實際の美は其うすぐらい建築物の內部にはいつて太陽の光線が色硝子を通つてはいつて來るのを見て初めて味ふ事が出來るものである。ゲーテは詩をば此色硝子に譬へて、詩は決して外から理解せらるべきものでなくて內部から理解もし鑑賞もせらるべきものだと云ふて居る。このことは更に轉じてディルタイの哲學に擬することが出來る。色硝子の窓を外側から眺める樣な思惟活動のみによる自然科學や形而上

學の態度に滿足せずに、彼は自分で自分の內界に深く入り込み、反省、分析によつて其奧底の秘をあばき、恰も美術家が、苦心をして古い歷史附の色硝子を集め意匠をこらして聖母とか聖徒とかの像を編み出しておいた窓をば我々が內部から充分に鑑賞する樣な態度を取つた。而して彼は今迄我々の氣附かなかつた廣い深い未見の世界を我々の前に展開してくれた。文化とか歷史とかに關する考察の進んだ今日ではディルタイの思想は見方によつては淺薄とも考へられやうし未熟とも見えやう。然し彼の思想は元來論理の整備を以て誇るべき性質のものではない。彼に取つては論理は我々の精神活動の一面であつて論理的態度は外面的皮層的の見方たるを免れない。であるから彼の思想其物を解するにも我々は矢張り外部から眺めたゞけでは失敗する。彼の思想の內部に入り、彼自身の立場に立つて考へて見る必要がある。いづれにもせよ、自然科學の全盛時代に起つて、自然と對立せる精神なる一大王國を發見し、其無盡藏の寶庫を開いて我々の前に提供してくれた彼ディルタイの功績は決して沒却すべからざるものであらう。（終）